

は一日その繪を三輪さんから借りて、私の家に持つて歸り、両親に見せたものです、然し餘り褒めないもので、私は大變に失望致したこともありましたが、其後三輪さんは、先生と一緒に八王子の方に寫生に行かれた時、又水彩畫を二三枚寫生された。それが秋の景で、錦の様に紅葉が山に一面彩られて、その下に農家が列んで居た圖です。セピヤで古い家を描かれたのが、恰も實物を見る様な氣がしました。今三輪さんは何所に奈何して居られるか、一度其時の畫を見たいものと思つて居ます。若し三輪さんの畫が見られぬならば、せめて其時三輪さんの畫を見て得た感喜だけでも得たいものと思つて居ます。(未完)

糸満の割舟に就て

糸満は琉球の首都那覇から二三里許りの處にある漁村で、圖は其處の漁船を描いたものである。往昔は皆この船に乗つて海上遙かに臺灣あたり迄出掛けたさうだ、若し不幸にも、途中で暴風等に遭遇した折は、舟と舟とを三艘位結び合せて、風のまにまにまかせて置けば、轉覆の恐れもなく至極安心して居る事が出来る、又若し一艘丈けて覆へつた折には、一人で元に戻して平氣で漕ぎ戻る事が出来るさうだ、だから始めて汽船が此の地方へ航した折には、皆若しあの船が引覆つた時にはとても元にかへすことが出来ないからと云つて誰も乗るのを恐しがつたさうだ。

(吉田博氏談)

私に畫か描けたらば(一)

磯 萍 水

私に畫か描けたらば、私は何を描くでせう、難かしい問題です、迂濶には答へられません、

文字でさへ、満足に書けない私が、何で畫がかけませうか。

然し私は、自分で答へやうが爲めに、此問題を提供したのですもの、實は少しばかり、二用意はして有るのです。

私は忙しい裡の休息を利用して、大擱みに其二三を擧げたいと思ひます。

私は山でも水でも、有の儘を描き出すに留まらなくて、その時々氣分を表はしたいのです、色でもよい、線でもよろしい、そして線には、『山岳家の見たる山の色』とか、『水郷の燈火』とか、『飛驒への途』とかつけて、觀る人に注意を與えて置くのです、私はその題によつて、私の得た二三の印象を並べて見ます。

秋でした、私が一人で、鳥居峠の頂上の鳥居の前に立つたのは、落日の光りが、精あるもののやうに、見る／＼雲の裡に舞ひ込もうとして居る、風は嘆のやうな音を立てて、空の空の彼方から落ちて來て、私の襟を吐いて、袖を濡がへして、すぐ脚の下もとの椽ぐらの森を管めては、一散走りに、範原の宿をいじめにかかつて、その板戸をゆるがして、爐の櫓火を騒がせやうとして居る、群山の中の落日の秋の暮、實にこの時の氣分を、謂ひ表はすのは、くどく／＼した文句などを並べる閑はない、悲壯の一語でもう謂ひやうはない、落日よ、落日よ、私の好きな落日よ、私は